

生物研究

第 XVII 卷 第 3・4 号

1973

(終卷記念号)

THE LIFE STUDY

Vol. XVII, Nos. 3・4

(Final Issue)

December 25, 1973

FUKUI, JAPAN

目 次

報 文

台湾産アナバチ科の研究 (X V) (英文)	常 木 勝 次 ... (39)
マメギングチバチの習性	田 塾 正 ... (50)
樹脂を使用するキュビギングチバチの習性	南 部 敏 明 ... (55)
トゲアシギングチバチについての観察	山 田 晴 昭 ... (61)
カヤの髓に造られたヒメコシボソバチ類の巢 (英文)	常 木 勝 次 ... (63)
トモンハナバチの巢の1例	常 木 田 泰 生 ... (74)
ニッポンジガバチモドキの巢	田 塾 正 ... (77)
フタモンアシナガバチの多雌創巣例の発見 (英文)	山 根 正 氣 ... (79)
スズメバチ属ハチ類のコロニー内の分業。Ⅲ, 外役活動	松 浦 誠 ... (81)
奄美群島の蜂類	室 田 忠 男 ... (100)
常木教授採集朝鮮産広腰亜目の蜂類 (英文)	富 樫 次 ... (103)
アナバチ科2種の学名変更 (英文)	常 木 勝 次 ... (113)
1972年台湾で採集した蜂類	室 田 忠 男 ... (115)
山梨県のアナバチ科 (第1報)	須 田 博 久 ... (121)
有刺類の行動等について	官 野 正 雄 ... (125)
白野山のソボツチスガリの巢	常 木 勝 次 ... (127)
カギバラバチ類の採集	常 木 勝 次 ... (128)

採 集 行

山梨県ハチ類採集コース	須 田 博 久 ... (131)
-------------------	-------------------

研 究 手 引

蜂類研究手引 (32)。日本産キマグラハナバチ属	常 木 勝 次 ... (135)
--------------------------------	-------------------

短 報

銀口蜂関係学名変更 (49)。筒巢に寄生したヒメバチ (49)。ウスギングチ福井県から初記録 (54)。ジガバチモドキ検索表の訂正 (54)。日本産ジガバチモドキへの追加 (54)。キュビギングチ福井県第2の記録。岩手・秋田県で採集したアナバチ科 (76, 南部)。ガロアギングチとニッコウギングチ (78)。モウソウタマオナゴバチの習性 (99, 富樫)。マルバツツハナバチの巣 (112)。サッポロジガバチモドキ福井県で発見 (113)。スミスハムシドロバチの巣 (114)。ツマアカツチバチを福井県で採集 (120)。フジジガバチの福井県内新産地 (120)。スキハラギングチについて (126)。オタネギングチについて (130)。エゾマエダテの学名変更 (134)。トゲアシギングチについて (150)。ジガバチモドキの獲物 (150)。埼玉県のアナバチ科 (150, 南部)。フクジスズバチの巣 (150)。

CONTENTS

K. Tsuneki: Studies on the Formosan Sphecidae (XV)	(39)
T. Tano: Nesting biology of <i>Entomognathus brevis</i> Linden observed in Japan	(50)
T. Nambu: Biology of <i>Crossocerus (Towada) flavitarsus</i> Tsuneki, using resin to close the nest entrance	(55)
H. Yamada: Some observations on nesting habits of <i>Crossocerus denticrus</i> H.-S.	(61)
K. Tsuneki: Nests of some Pemphredonine wasps in the pith of <i>Miscanthus</i>	(63)
Y. Maeta: A nest of <i>Antidium septemspinorum</i> Lep.	(74)
T. Tano: A nest of <i>Trypoxylon nipponicum</i> Tsuneki	(77)
S. Yamane: Discovery of a pleometrotic association in <i>Polistes chinensis antennalis</i> Per.	(79)
M. Matsuura: Intracolony polyethism in <i>Vespa</i> . III. Foraging activities	(81)
T. Murota: Some aculeate Hymenoptera collected in the Amami group of the Ryukyus	(100)
I. Togashi: Tenthredinoidea of Korea collected by Prof. K. Tsuneki in 1941-43	(103)
K. Tsuneki: Taxonomic notes on two species of Sphecidae	(113)
T. Murota: Sphecidae, Mutillidae, Scolidae and Chrysididae collected in Formosa in 1972	(115)
H. Suda: Sphecidae of Yananashi Pref., Japan	(121)
K. Tsuneki: A nest of <i>Cerceris saba</i> on Mt. Hino, Fukui	(127)
K. Tsuneki: On Trigonalioidea of Japan	(128)
K. Tsuneki: A guide to the study of the Japanese Hymenoptera (32). The genus <i>Nomada</i> Scopoli	(135)

ptères Crabroniens. Thèse, Fac. Sci. Univ., Liege. 371 pp.

Miller, R. C. and Kurczewski, F. K. 1972 A Review of nesting behavior in the genus *Entomognathus*, with notes on *E. memorialis* Banks (Hymenoptera: Sphecidae).

常木 勝次 1960 Biology of the Japanese Crabroniae (Hymenoptera, Sphecidae). Mem. Fac. Lib. Arts, Fukui Univ, Ser. II, Nat. Sci., No.10, Pt. 1, pp.1-53.

ウスギングチ福井県から初記録

1♀, 赤兎山道 (900 m), 31. VIII. 1973. *Ectemnius (Cameronitus) flavohirtus* Ts. は珍しいハチで、日本からこれまでに石川県白山麓, 市の瀬の旧山田屋付近からだけ採集されている。この種は珍しいだけでなく、黄斑の豊かな美しいギングチバチである。*Nomada* の採集中で、路傍の短い草の疎生している所をさがしていたとき、アリが黄色い虫をひいていたので取上げてみたところ、紛れもなくこの珍品であることがわかった。少しも痛んでおらず、老衰もしておらず、死んだばかりと見えてまだ柔かく、申し分のない状態であった。市の瀬ではウドやシシウドの花上でとれたので、それらの花を注意して歩いたが、1頭を見つけることはできなかった。越えて9月15日、同じ道でカラマツの樹下にハチが集まる所を発見し、ここで多種多数の珍品を得たが、その中に1♀2♂のウスギングチが含まれていて、この種が鳩が湯付近の山地に住んでいることが確認された。

なおついでに記しておく、その翌日に米国からまた訪ねてきたDr. Krombein を連れて白山へ出かけたが、時間があつたので同行の富樫、田壘2君と4名で、昔この種がよく採れた山田屋の跡へ行ってみた。そこはススキ原と化していたが、見覚えのカラマツの大木は昔のままに立っていた。その下の笹原へ分け入って採集したが、ギングチ類がたくさんとれ、その中に3頭のウスギが混っていた、この種がここでも健在であることが確認された。

ウスギングチは日本では上記した2か所だけしか採集記録がないが、この種は元来南方系の蜂で、台湾からはこれまでに3頭とれている(平嶋, 私, 室田)。だから日本南部には当然いると思われるので、研究者の今後の注意をうながしたい。(常木)

ジガバチモドキ検索表の訂正

本誌前号にジガバチモドキの改訂検索表を発表したが、次のような重大な誤りがあることに気づいたので訂正されたい。

p. 33の右側の検索番号の18と19とが逆になっている。18を19に、19を18に改めること。

なお、同ページのリュウキュウジガバチモドキの学名を *responsum ryukyuense* と訂正すること。

(常木)

日本産ジガバチモドキへの追加

ハラアカジガバチモドキ *Trypoxylon gracilescens* F. Smith.

イシガキジガバチモドキに酷似した種で、南方の諸島から台湾まで広く分布している。イシガキとの違いは、主として触角節の比長にあつて、本種ではイシガキに比べて鞭節の各部が長く、全体として末端への太まり方も弱い。本種の同島からの発見によって、イシガキがハラアカの亜種でなく、完全な独立種であることが証明されたわけである。(常木)